

# 慢性動脈閉塞症

## 遺伝子治療を

## 徳大病院開始

四国初



八木秀介特任准教授

徳島大学病院は、足などの血管が詰まって潰瘍ができたり壊死したりする「慢性動脈閉塞症」の患者を対象に、国内初の遺伝子治療薬「コラテジエン」を使った治療を始めた。遺伝子治療薬を使う施設は全国でも珍しく、四国では初めて。

徳大病院によると、慢性動脈閉塞症は動脈硬化や炎症で血管が詰まって血流が悪くなる病気で、閉鎖性動脈硬化症とパーシャール病という二つの疾病がある。初期は患部に冷えやしびれを感じ、症状が進むと歩行時や安静時にも痛みが出る。手や足に潰瘍ができたり壊死が起きたりし、最終的には救命のために足などを切断することもある。

抗血栓・血管拡張薬によ

る治療のほか、風船やステントと呼ばれる金属の筒を使った血管拡張、血管をつなげるバイパス手術などの治療法があるものの、効果が得られないケースもあった。

コラテジエンを使った治療は、新しい血管を作り出すよう促す遺伝子を潰瘍ができている周辺の筋肉に注射する。すると、詰まった血管の周辺に新しい血管ができ、血流不足で生じていた潰瘍が縮小、消失する。

1回につき8カ所注射し、4週間置きに2、3回行う。

1回の時間は15分程度。

徳大病院では2月から、従来の治療法では足の潰瘍が治らない患者を対象に治療を始めた。既に県内在住の患者1人で潰瘍の消失が確認できたという。

コラテジエンは2019年3月から5年間の条件・期限付きで承認されており、正式な承認には有効性を確認して再度申請が必要になる。担当の循環器内科・八木秀介特任准教授は「全ての慢性動脈閉塞症の患者を救済できるよう、効果のある症例数を積んで正式な保険承認につなげたい」と話している。

(中野愛子)